特殊地区に於ける家族軋轢と児童に対する影響

新制三回生　金谷昌子
鈴木百合子

前がき

昭和二十七年七月より約一ヵ月国立精神衛生研究所が主体となって福島県常磐炭礦地区内の内郷町に於て社会調査が行われた。私共はそれに参加する事が出来たが、この論文はその際行われた青少年問題調査、学校教育調査に於て集められたデータを参考として、特にその中より特殊地域（炭礦地区の様な）におかれた家族の中に発生する家族軋轢がどの様なものであるか、又それがどの様に子供に影響するか、という問題をとり上げて研究し、考察しようとしたものである。尚家族軋轢の理論的裏づけとして土井正徳博士著の「家族軋轢の科学的分析」を参考として述べてあるが、この一般論の部分は紙面の都合上割愛して述べる事とする。

本論

福島県の太平洋沿岸、常磐線にて東京より約六時間平市の一つ手前に綴（つづら）という駅がある。調査対象地の内郷町はその綴駅を中心としているが、列車より見ると町というよりむしろ村といった感じのする稍寂れた町である。しかし駅の構内に列をなす石炭を山と積んだ貨車の群は、この町が消費地としてより、生産地として発達した町である事を示している。低い丘陵が起伏する中にそそり立つ三角形のズリ山（石炭のかすを捨てる山）鉱業所の高い煙突、きちんと列を乱さず立ち並ぶ炭礦従事員の長屋式住宅、そしてめったに雀の姿さえ見られぬ無味乾燥な印象をうける町である。この地区の家族状態の特殊性に入る前にまず地区としての特殊性を述べてみると次の様である。

㊀ 地區の特殊性

(1) 家屋形態の特性

炭礦地区の何処もと同じ様にこの町も炭礦従業者は会社の社宅へ入っている。この社宅は殆どが、四、五軒又は十軒位を一むねとする長屋式になっており、それが十数むね乃至数十むね集まって一つの集中的住宅地となっている。こういう長屋式住宅は狭い地域に密集的に人が住む事になるから近隣関係を密にする。従って家庭が近隣によって干渉される様な事も多くなり、家庭は近隣によって縛られ、影響される事も多くなってくる。又一軒の家としては非常に間数が少ない。一間又は二間が殆どでしかもこれに住む家族は一般的に多人数が多い。具体的数字を挙げるならば八畳位の部屋の部屋一間に対し、八人も十人も住んでおり、こういう例が少なくないのである。こうした現状は家庭内で豊かな雰囲気を作るのに大きな妨げとなる。即ち家族は何時も狭い場所に雑居しなければならないので感情的な衝突が起り易くそれが表面化し易い。そしてそういう事態が起った時には家庭外でも職場が家庭と地域的に一致している為に緊張が持続していく場合が多いと思われる。

(2)社会階層の分化（社内社外について）

社内社外というのはこの町特有の言葉である。即ち社内とはこの地最大の企業体である常磐炭礦会社の社宅内に住む者を云い、それ以外の町の住民は社外と呼ばれている。この社外の中には常磐炭礦以外の中小炭礦従事者、農業、商業、工業等の関係者が含まれている。この町で社内社外の別は生活的にも意識的にも大きな差を与えている。即ち生活の点からみると社内は社外より経済的に恵まれている。これは単に収入面丈ではない。社内には無形有形の援助が会社から与えられている。即ち住居とその修繕費光熱費等の会社の負担は社内階級の一種の特権である。この様に社内は種々の点に於て社外より恵まれ、社外に対しては優越感をもっているが、社内にはそれ自体に階層的な分化があり、潜在的顕在的に対立がみられる。即ち大きく分けては経営者側と労務者側に分かれ、細かくは職種別階層であり、その中でも一般社員と礦夫はは、っきりとした区別がある。この社内に対して相対的におかれているのは社外である。社外は農業、商業、その他炭礦を含め人口比にして六割を占めているが、この内郷町を実際に動かしているのは大資本を持った常磐炭礦であり、その他の人々は感情的に相通ぜぬものを持っていてもこの会社の政治的経済的に大きな力は認めざるを得ない。というのはこの町の経済は常磐炭礦によって支えられている面が強いからである。社外のうち下の階層を占めるものは失業対策による日雇人夫である。炭礦地区は石炭の炭価の上下によって景気が変動し、それによって会社の経営も大きくしたり小さくしたりするので、失業者の数も景気によって変動する。従って失業者は再職を目的として日雇い人夫となりこの町より出ずに住みつく様になる。

(3) 三交替制

炭礦地帯には労務制度の一つとして三交替制がある。これは労働基準法に従い一日二十四時間を三等分し、労働者を三班に分けて順次に仕事につかせ作業が中断する事のない様にした制度である。即ち一番方、二番方、三番方がそれで一番方は朝六時から二時迄、二番方は二時から夜の十時迄、三番方は十時より六時迄という様に作業につくのであるが、これは一週間交替で一番方は二番方へという様に移って行く。

以上は炭礦地区という地域の特殊性についてその大略を述べたものであるが、次にこの地区に於ける家族形態の特性について述べると以下の様である。

㈡ **家族形態の特性** (1) 多子と多種の家庭

(a) 多子について

これは生活程度の低い地にはよくみられる現象であるが、この地区もこれが特徴となっている。これに対し具体数を上げてみると次の様である。即ち町の小学校・中学校より抽出したクラスに対して行なった調査の結果を統計的にまとめてみると次の如き結果が出た。即ち最も多い子供の数は、六人で全体の二割五分を占め、次に五人が多く、次に七人、九人という様なカーブを示し、一人子又は二人位というのは珍しい例であった。以上の結果の如くこの地区の全般的な傾向として子供の数が非常に多くなっている。この要因として考えられるものに次の様な事項がある。

まず無計画出産ということで、これはこの炭礦地区の人々が共通にもっている生活に対する惰性、生活の向上を積極的に進めな

いという態度が子供という事に向けられるとこの様な状態になってくるのではないだろうか。出来るものは仕方がないという様な考え方が産児制限という時間的にも経済的にも多くを要する事を避けさせているのではないか、しかし受胎調節が普及していないのも事実である。

次に考えられるのは経済的な問題であるが、都会に於ては子供は家族において純然たる消費者の立場にある。しかしこの炭礦地区においては子供にも收入を得る簡単な方法がある。即ち内職の様に扱われる仕事に炭拾いがある。これは石炭のかす（ぼた）を捨てるズリ山へ入ってまだ使える石炭を拾いそれをブローカーに売って代金を得るものである。従ってこれにより子供は金銭が得られ、それが子供の小遣いとなるばかりでなく、家計の助けになる場合も多いので親はそれを止めるよりもむしろ助長したり指示したりする傾向がある。こういう子供の位置は潜在的労働力と云える。又この地区は生活水準が低いというばかりでなく、低くしても周囲の状況からして生活して行けるのである。それ故に子供がふえても住宅は狭いながらも与えられているし、食料と衣料が一応足りていればそれでも済む、特に衣料は足りなければそのまま間に合わせてしまう。従って調査中は夏であったが、子供達は裸ではだしという姿で遊んでいるのがしばしば見受けられた。そしてこれは子供ばかりでなく、大人にもみられた事である。

こういう事と子供に対する躾とか教育的無関心は子供を育てるのに経済的な負担が少なくて済む。従って子供が多くても家庭経済はどうやら成立って行くのである。

次に娯楽が少ないという事から引起される多子という事も考えられる。即ち夫婦の性生活が刹那的の楽しみとなるからである（娯楽機関は映画館二ヵ所が主なものである）。

(b) 多種の家族について

多種の家族とは異った系統の家族が同居して生活している状態をさす。即ち義理関係によって結ばれた親子兄弟の同居、叔父叔母の同居、祖父母の同居等である。この炭礦地帯の家族構成にはこうした例がしばしば見られる。家族成員数が多いばかりでなく、非常に複雑な構成状態を呈している。その一例を挙げれば次の様である。夫婦間に子供が生れたが妻が死んだ。そこで夫が再婚して又後妻との間に子供が生れた。しかし今度は夫が死んだので後妻が先妻の子と自分の子を連れて再婚し次の夫との間に子供が出来た。この例は数種の系統の異った子供達の同居であるが、こうした例の外にも、二世代の夫婦とその子供の同居、祖父母又は叔父叔母の同居等の例が多い。社員住宅という限られた数の住宅しかもたぬこの地には農村にでも見られる様な大家族形態の例もしばしば見受けられる。

(2) 義理関係と環境

前述の多種の項目でも述べた様に、この地域の家族構成には義理関係によって結ばれている状態が多いという特徴が見られる。そしてこの場合特に云えるのは、親子の義理関係である。即ち継父、継母の例が相当数あるのである。これは統計的にも云えるが、こうした状態を生み出した要因を考えてみると次の様な事が挙げられる。それは大人達の結婚に対する考え方である。この地区の人々の生活態度は全般的に安易、刹那的であるが、そういう事が男女の結びつきにも云えるのではないか。結婚、離婚、再婚

が子供の有る無しに拘わらず比較的簡単に行われている様な実状であり、その場合も彼等が固定した住民でなく、故郷から離れている為に子供を引取ってくれる様な所もない。従って親は子供の生活に対しては全責任を負わなければならず、自分の結婚の時も連れ子として行く様になる。こうした事情から親子の難しい間柄を生み出している場合が多い。そしてこうした義理で結ばれた家庭に対する周囲の働きかけはというと、その特別視する傾向は一般的社会と同様であるが、それが密な近隣関係の為に刺戟の度合が強くなる。即ち安易な生活態度ではあるが、壁一つへだててという状態の為に或る家庭の特別な関係という事は近隣に直接ひびく。特に親子兄弟間の難しい間柄という事は、娯楽の少ない周囲の人々の好奇心や、ひまつぶしのおせっかいな気持を満すのに絶好な事例となる。対人関係の比較的浅い都会でもみられる事であるから狭い地域に密集的に住む条件の処では一層拍車がかけられる。そしてそれ故にその当事者の家庭にとっては近隣によってはなはだしく縛られている事になる。

(3) 親の教育程度

この炭礦地区の住民の教育程度は全般的にみて低い状態にある。小・中学校より抽出したクラスに対して行なった調査の結果をみても、父親の場合は高等小学校以下が八割、母親の場合は、同じく九割を占めている。それも農商工が含まれている地域よりも炭礦従事者のみの地域の方がこの傾向は強くなっている。そして義務制の小学校も終えていない者も多少見当る状態である。この様な両親達の教育程度の低さは、子供の教育に対する無理解、無関心を生ぜしめている。子供の教育は学校がしてくれるもの、即ち学校一任が殆どの親達の傾向であって学校に対し親の方から積極的に協力するものはごく少数に過ぎない。これは学校へ時々来て子供の教育について教師と連絡をとっている親を珍しい例としている教師の言葉からも、又教師の家庭訪問が親達の迷惑相な態度で迎えられているという事実からも容易に伺われるのである。

(4) 生活の非合理性（生活の設計なし）

炭礦従業者の生活態度は消極的であり、進んで生活の設計などしようとしない。それは彼等の生活歴からみると当然といえるかも知れない。即ち彼等は他の土地他の職業に於て失敗した人生の落伍者か敗残者が多いのである。そして炭礦へ行けば何とかなるのではないか、という安易な考えから仕事自体熟練を要しない炭礦へ流れて来た場合が多い。自分からの意志希望によって炭礦を撰んだのではなくして、生活を保つ為に又はパンを得る為に働いているに過ぎない。その様な落伍者という気持と、仕事に矜りのもてぬところから来る劣等感は生活を高めるとか、建設的な方向へもっていくとかする意欲を喪失せしめている。そしてこの意欲喪失を更に強めるものは、三交替制から来る生活のずれと烈しい肉体労働である。それにこの労働には常に災害という生命の危険が伴っている。こうした種々な条件から消極的というより、むしろ惰性的な生活態度が生れてくる。それは彼等の様な生活歴、立場をもつ者には必然的と云えるかも知れないが、しかし生活面にプラスとは決してならないのである。この生活に対する無計画さ、非合理性を現わす例として次の様な事柄がある。

精神的経済的にも生活の設計は立てていない。具体的には家計簿等は殆どつけていない。社宅内に居住するものは与えられた住

宅器具を自分のものという所有感のないままに無駄に、必要以上に使い果す。生活用品の備え方も無計画である。その家庭にとって本当に必要なもの生活に有効なものは後まわしにされ、その代りにそれ程必要とは思われぬ贅沢品流行用品、（例えば電器・自転車・カメラ・ミシン等）が置かれている様な状態である。そして社内の場合にはこの態度を助長するものに、会社でとられている通帳という制度がある。この制度によれば、物品購入の時には現金で支払わなくても通帳上で給料から差引かれるのみで物が手に入る為、現金が手許にない時でも比較的安易に買物が出来るのである。その為極端な場合には給料が殆ど残らないという事も起ってくる。会社にとっては合理的な方法も往々にして人間の購買慾をそそり、必要度のそれ程高くないもの迄近所等に刺戟されると買ってしまう結果となる。又近隣関係が密な為、その交際も盛んでおごったり、おごられたりするのも頻繁に行われる。そして特に冠婚葬祭等の時には経済的な無理をおかして迄も派手に行う。周囲がすべてそういう状態である為に、自然に競争的になり、それが悪循環して家庭を、その経済を圧迫する事となる。

(5) 共稼ぎ

これは一般的に夫婦が共に就職する事をさすが、この地域に於ては子供をもつ主婦が仕事に出ている例が多数みうけられる。これは勿論経済的な問題も考えられるがそれと共に炭礦という職場（この職場には掘炭婦という婦人専門の仕事がある）が家庭の附近に存在するという事、近隣が接触し頻繁な交流がある為に家庭を留守に出来る事等の理由があるからと思われる。しかしこの様に主婦が家庭を外にしている場合には、家庭に於て主婦（母親）が子供と直接的に接触していく事から生れる愛情的なふれ合い、子供に対する適当なしつけ、家庭的な暖かい雰囲気を作る事などにおいて欠けるものが出来てくる。そしてこれは子供に愛情的なフラストレーションを起させると共にパーソナリティの成長にも悪影響を及ぼすところ大と思われる。

(6) 坑夫の人生観

炭礦に従事する労働者はその生活歴、特殊な生活様式から一種の人生観ともいうべきものを持っていると思われるが、それを一つの例を挙げながら次に述べると、この例に挙げる家庭は父親が中心となっていて、家族のすべては父親の影響を強く受けている。この父親は、若い頃故郷を出てこの炭礦地区に流れて来たのであるが、現在の妻と結婚し子供が出来ると間もなく坑内の落盤により大腿部を骨折して坑夫が続けられなくなり、為に生活難に苦しめられて数回自殺をはかった事がある。しかしその度に未遂に終って現在に至っているが、その間に子供は次々と生れて典型的な多子の家庭となっている。しかしこの家庭の現状は、以上の様に父親が災害によって再起不能となったにも拘わらず子供達（男の子）はその危険性の伴う炭礦の労働に従事しており、あまつさえ次男が父親と同じ条件下の落盤により生命を絶たれている。こうして一家が同じ不幸をくり返し合っても父親も母親も男の子は炭礦で働かせると云う、こういう考えの中に流れるものは運命に対する従順な、むしろあきらめ的な気持である。積極的に不幸を防止しようとする意慾はない。そして住宅にも恵まれ、一応安定した経済が営める生活環境の下で妥協して（災害に対しても）生活している。保安設備が向上して災害が少なくなって来たとは

云え、まだまだ他の職業にくらべては余程危険率の高い炭礦労働に従事するものは多から少なかれ、なる様にしかならぬという暗い宿命論の様な考えに支配されており、それが前述の例に端的に見られる様に子供に受けつがれ、両親の考え方を自分の考え方とした様に家庭内の不幸を反復している、他に職業を求め様としても現今の社会情勢はその望みをかなえてくれる余地はない。そこで一応失業という恐れがあまりない炭礦労働にしがみついてこの地にとどまっている。こうした現状からその傾向も現実的、刹那的になるのであるが、反面この非建設的な現状にあき足らず他地域へ仕事を求めて出かけている青年男女の数は相当数に及んでいる。狭い地域社会に萎縮している炭礦の生活は発展性のまだ強い、それ故に親に反抗しがちな青年をして外へ出さしめているのではないかと思われる。社会的に経済的に非常に生産的な炭礦の労働はそれに伴なう破壊性によって程度の差こそあれ、人間に対して強く影響している。

これ迄述べて来たのはこの炭礦地区の特殊性とそこに置かれた家族形態の特殊性であるが、それならばその家族の中に発生する家族緊張及び軋轢はどの様なものであるか、又それが子供にどんな影響を与えるか次に述べたいと思う。（この場合参考とするケースは調査に於てとり上げられたものである）

家族軋轢は他の人間関係に発生する緊張、軋轢と同様感情のもつれが最初のものであり又最後的なものである。しかしこの感情的なもつれ衝突はその人間の置かれている条件によって種々な様式を呈し緩和したり強化したりするものである。換言すれば人間の置かれている状態が感情的もつれに大きな影響を与えるとも云える。炭礦地区はその社会的特殊性があるが故に家族間の感情的なもつれにもそれが影響するところ大である。その特殊性に基づいて子供に与える影響を考察して行くことにする。

(三) 特殊性の子供に與える影響

(1) 家屋形態

当地区の家屋形態は前述した様に長屋式密集住宅である。この様な状況下に於ては地域社会としての社会的軋轢も強いと考えられるが、その中に置かれた家庭内の家族軋轢も亦強められると見てよい、しかもこの長屋は一家族に対して一間乃至二間しか与えられていないにも拘わらず、それに居住する家族の構成員数は全般的に多いのが特徴である。具体的に云えば一間に対し八人も十人も住むという状態であるが、こういう人口密度の高さは、人間同志の接触する機会が多くなるから、感情的な密度も高くなる。というのは人間の接触する機会が多くなり人間間の距離が近くなればなる程その相互間に働き合う感情的な刺戟と反応が頻繁となり、それが又新たな刺戟と反応を呼んでそれが循環的に作用し合って行くとそこに感情的な密度が高められてくる。そしてここに成員間の感情の衝突という事態が引起ると、この高い密度の中で育てられて破壊的緊張が強くなる。こうした緊張が家庭内に蓄積されると、それははけ口を求めて家族の中でも弱い所に向かって働きかける。

その弱い所は子供であるが、家庭内は狭く、地域的にも限られていてそれ等子供達の緊張を放散する場所が少ない。即ち適当な遊び場等にも不足している。この地域のうち人口密度の低い農村部落と炭礦従事者部落と比較すると前者に殆ど非行少年が見当ら

ず、後者にそれが多いのもこうした条件が考えられると思う。

(2) 多子多種の家庭

(a) 多子の場合

一家族に子供の数が多いという事は、兄弟間の心理的競争により感情的葛藤を生み出し易い。即ち父親や母親を中心としてこれに対し個々の子供が人間の基本的欲求に基づいて働きかけると、その相互間に調和の保たれていない場合にその作用がお互の感情を刺戟して嫉妬とか敵意、憎悪等の感情的障害を起す様になる。こうした障害の発端は個人の感情的不満であるが、多子の場合はそれが満たされる機会が一層少なくなるから個人緊張は強められる。そうした個人緊張が密な兄弟相互間に働き合うと兄弟間の軋轢は強まる。この軋轢が表面化したケースを挙げると次の如くである。まずこの家庭の家族構成についてふれてみると、父母の許に子供が十人祖母とで合計十三人である。これは子供の問題行動という表面化した事実によって裏付けられた例である。問題を起した子供は十七才、長男で上に姉がある。問題行動は窃盗及び不良交友であった。このケースの場合は典型的な多子の家庭であるが、それに長屋という環境も軋轢を助長したものと考えられる。即ちこの家庭は家族十三人であるが、それに対して与えられている部屋は六畳二間である。従って家の中は子供達で満ち溢れ、両親特に母親は一人一人の子供の世話など及びもつかない状態であり、従って年下の子供に注意が向く。それにこの本人は、幼児期の時姉と祖母の許で育てられたが、祖母がその愛情を姉のみに集中して本人はかえりみられなかった。それが父母の手許に帰っても弟妹達が大勢いるので祖母の許で味わった愛情の欠乏を肉体労働の烈しい父からも弟妹達にかかりきりの母からもみたして貰えず感情不満が高まっていった。多くの弟妹達の存在は彼にとって嫉妬の対象となる。そして家庭内でみたされぬものを外で求め様とした。こういう場合学校や教師が子供を惹きつけるものを持っていると子供は代償的満足が与えられるが、それも十分でなかったので不良仲間に誘われていった。以上で判る様にこのケースの子供は多子から来る軋轢と家庭内の空間的な狭さから来る感情的な密度の高さの中にあって家族の中では弱い所となっていたのである。(幼時、姉と祖母を中心とする愛情的競争に破れた為)この場合に母の理解ある愛情的な態度があったならばこの問題行動も防げたと思うが、この母親自身連続的な姙娠、分娩の疲れと大勢の子供達の世話、家事に追われてその余裕がなかった。子供に対する躾といえば悪い事をした時に頭から叱りつけたり体罰を加えたりするのみである。特に愛情を欲している子供にとってはこういう母親の態度を不満に思い、家庭外のものに逃避したと思われる。このケースの外にも云える事は、この地の窃盗はその対象が殆どが石炭、炭礦で使う鉄材、木材等であり、これらの物は大部分が管理もない儘に放置され散在している。とは云っても所有は会社なのでそれを持って行くと窃盗行為になる。換言すればこれ等の物の放置は、満たされぬ子供達の心を刺戟するとも云えよう。

(b) 多種の家庭の場合

まず典型的なケースを挙げてみると、これも窃盗、家出、浮浪等の問題行為をもった子供の例である。まず家族構成はと云うと、父親は実父であるが、母親は継母である。この両親の許に子供は八人あるが本人の実の兄弟は一人もなく継母の連れ子が四人

に、実父と継母の間の子供が三人に加えて叔父が同居している。合計十一人である。こうした複雑な家族状態から起った軋轢は継母と血のつながりがないというひがみをもつ本人に対して大きく作用したと思われる。このケースの場合は多種であり、多子である家族間の感情的なつながりの薄さが問題をもった子供に表面化して現われたと解釈出来る。即ちこの場合感情的なつながりの薄さは兄弟の間に同類意識が起らない為に他人を兄弟と思い、他人を母と思わねばならぬ感情的な無理がその稀薄さを生み出している。それにこの地によく見られる父親の強圧的な態度はこうした家庭の軋轢を破壊的にもって行ったのである。

(3) 三交替制

この制度の説明は前述してあるが、それならばこれは子供にどういう影響を与えるであろうか。まずこの制度は家庭生活を不安定にする、というのは生活が一週間ずつずれて行く為に固定した生活様式が営めないのである。この制度によれば父親の作業につく時間は年中一定していない。その為に家庭生活もそれに合わせて行く為に子供に対するしつけにも一貫性が保たれない。特に三番方で父親が深夜業に従事する時は昼間睡眠を取らなければならないから、子供はその間無理に静かにさせられるか、家の中が狭い為に外へ出されてしまう。又近所でも同様な状態である為に、外でも思う様にさわいだり遊んだり出来ない場合が多い。大人に理由のある事でも子供には納得出来ずに不満のたねとなってしまう。それとこの時間的なずれは夫婦生活の性的な面に於てもずれを起し、子供の不満を更に助長するか、又は性的に刺戟するか等の悪影響を及ぼす。この地域の子供が性的に早熟だといわれるのもこうした事が大きな原因となっていると思われる。子供のうち問題を乳幼児にさかのぼってみると一層深刻である。乳児は泣く事を制限されて何時も抱かれたりおぶされたりしている事が多い。乳幼児に対するしつけの調査に於て 〃乳児が泣いた時はどうするか〃 という問に対し、すぐ抱いたりおぶったりするという答が非常に多かったのは父親又は近所の睡眠を妨げない様にする母親の注意からであろうが、その為に、乳幼児の正常な発育をも妨げる場合が多く見受けられる。即ち坐ったり、立ったり、這ったりする時と場が与えられないうちに歩く時期が来たりする様な変則な状態が調査結果にも表われている。その様に乳児で親の手が必要な時には身体的精神的な発達も束縛されているが、その時期が過ぎると多子の傾向が多い為にその子供は放任されてしまう。これによると乳幼児には制限の多い状態から急に殆どかまわれない状態へ移行する事になるが、その移行の仕方が烈しければ烈しい程、子供のパーソナリティに残す傷痕も亦大きい。三交替制という制度は大人の中にもその不規則さから感情的なもつれを起し易いが更に子供には以上の様な影響を与える。

以上は軋轢を生み出す個々の要因について述べたが、それならばこれに対してどの様な措置が考えられるだろうか。それは社会的施設の充実である。遊び場の少ない幼児には保育所の増設という事が考えられる。人口三万八千のこの町に、保育所はわずか二カ所である。保育所の充実と共にその保母等を通じて両親を啓蒙する様に働きかける事も出来よう。次に問題のあるのは、中学卒業後高校に子供を進学させる余裕がない為に、労働基準法によって炭礦に就労出来る迄は子供は浮き上った存在になるがその為

にこの年令の少年の非行が多い。これ等の少年達にも職業学校の様な養成機関がもっと考えられてもよいと思う。

しかしながら社会施設の問題も重要ではあるが、それよりも子供にとってより根本的な事は両親の問題である。この炭礦地区に住みながらも、家庭が調和を保って子供も問題を起さない家庭が沢山あるのである。近隣関係が密なるままに一日中近所と雑談をして日を送る母親ばかりではない。保育所の保母や学校の教師と連絡をとって子供に暖かい注意をはらっている母親もあるのである。子供にとって重要なのは母親のこうした理解のあるやさしい愛情であると云う事は云う迄もない。一般社会と同じく、むしろより強く炭礦地区の様な特殊地域にはこういう母親の増加が望まれるのである。

昭和二十八年度　卒業論文題目

一、ホスピタリズムの研究……井福京子　小沢スミ子
一、庶民金融機関としての公益質屋の必要性について……兼松昌子　内山邑子
一、年少労働者と余暇生活……溝淵千香子　鈴木洋子　田坂恭子
一、諷刺文学と時代の関係……原川純子
一、長期欠席児童問題……北沢洋子　美座米子　辻村英子
一、身体障害者職業補導の問題点（特に女子身体障害者について）……小林洋子　塚越ミサヲ
一、乳幼児双生児の性格研究……江部文子　鈴木善子
一、少年性犯罪の分析的研究……宮田キヨ
一、生活保護法に於ける最低生活について……中田和子　桑原幹子
一、青少年不良化防止対策の実態……加藤美智子　松沢道子
一、ケースワークと芸術……大柴洋子
一、九州炭礦の主婦のくらし……今泉悦子　篠塚瑞子
一、日本の放送プログラム内容の変遷—放送プログラム内容の分析—……清水安子　柳本りう子
一、日本人の権威主義的性格の行方……新井文子
一、嫁姑の問題＝「嫁と姑」＋×……天野知子　小林和子
一、精神分析の流行……滝沢宮子　渡辺敏江
一、非行少年に於ける親子関係……大森哲子　川口京子
一、青少年と音楽放送……宮本靖子　小山不知子　杉山博子
一、新聞に於ける広告はどうみられているか（反復効果に関する心理テスト）……岡田敏子
一、児童憲章制定後の児童問題……金子和敬子